
アイレンと向日葵と私の思い

金城 ユウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

アイレンと向日葵と私の想い

【Nコード】

N7955C

【作者名】

金城 ヨウ

【あらすじ】

幼馴染の樹が好きな私。しかし樹が好きな人は、明日、結婚していく人。

「ねえ、夏音^{なつね}。早瀬君^{はやせ}、どうしたの？」

昼休みに、一緒にお弁当を食べていた親友の佐々木^{ささき} 彩^{あや}が、訪ねてきた。彩の視線の先には一人の男子生徒、早瀬^{はやせ} 樹^{いつき}が、焦点の合わない目でグラウンドを眺めている。

なぜ、彩が私にこんなことを尋ねるかということ、私と樹が幼馴染だからだ。もちろん私は樹の様子がへんな事情も知っている。

「どうして？」

「どうして？ って、明らかに様子がおかしいじゃない」

色々と詮索されるのも嫌なので、差し支えない程度に話すことにした。

「樹、失恋したのよ」

「えっ、夏音、早瀬君振ったの？」

私は、思わず飲んでいた紅茶を噴出しそうになった。

「なんでそうなるのよ！」

「なぜって、夏音と早瀬君、付き合っているでしょう？」

「付き合っていないわよ！ あいつとは、まだ幼馴染のままよ」

彩がニマリと悪戯っぽい笑みを浮かべる。うっ、しまった。失言だった。

「ま、だ、幼馴染のまま。ねえ」

「なによ。言いたいことは、はっきり言いなさいよ」

そうは言ってみたものの、彩のからかいに顔が熱くなった。

「なにも〜」

ニヤニヤする彩から視線をはずして照れ隠しにお弁当を頬張る。そんな私を見ながら彩が真剣な表情をする。

「でも意外ね。早瀬君、女の子から告ぐられても、好きな人がいるからって断るじゃない。好きな人って夏音だと思っていたよ」

「何でそう思うのよ」

私は、食事を中断して彩に尋ねる。

「だって、幼馴染だし」

「幼馴染は、関係ない！」

即刻、否定する。

「夏音、早瀬君のこと好きでしょ？」

「私は、樹のことなんて……」

狼狽する私を、彩はまたニヤニヤと見る。そして、止めを刺してきた。

「好きじゃないの？」

私と彩の間に沈黙が訪れる。彩は何も言わずに私の答えを待っていた。

「好きだけど、樹が好きなのは、他にいるから……」

そう言った私は、泣きそうな表情かおをしていたと思う。

「樹、授業終わったよ」

私は、樹に声をかける。これもいつものこと。

「夏音か、寄りたい所があるのだが良いか？」

「ジューズ1本で、付き合っただけあげる」

いつもの軽口。でも私は、内心びくびくしていた。樹の様子がいつもと違うから、樹が何を考えているかも、わからなくなっていたんだ。でも樹はいつもと同じ笑顔を私に向けてくれた。

「ああ、いいよ」

いつもと同じ反応。それが、とてもうれしくて、自然に顔がほころぶ。

「それで、どこによるの？」

「ああ、花屋だ」

「花屋？ 樹が？ 似合わない」

私の反応に、樹が苦笑した。

「ひでえな。でも、花より団子だからな。俺もお前も」
さらっと私まで、同類にする樹。

「それは、樹だけだよ。私は花のほうが好き」

私のセリフに、疑わしげな視線を向ける樹。そして、ため息をついた樹は、かばんを持って教室を出て行く。

「ちよつ、ちよつと待つてよ」

「嘘つきは置いていきます」

振り返らず、右手を振る樹。

「ちよつと、まてー！ 誰が嘘つきだ」

私はすたすたと先に行く、樹の背中に飛び乗った。

「樹君、いらつしやい」

花屋の女性店員は、樹の姿を見て微笑んだ。そして私のほうを見たので、ぺこりとお辞儀する。

「あら、樹君の彼女？」

「違いますよ。例の花を贈りたい人の妹で、幼馴染の夏音です」

その言葉を聞いて、少なくともシヨックを受けた。やっぱり私は樹にとつて、ただの幼馴染でしかないのかと。

「夏音？」

樹が私を呼ぶ。私は、あわててその女性に挨拶した。

「風間夏音です」
かざま なつね

「私は、秋野梢。ここの店長よ。よろしくね、夏音ちゃん」
あきのすえ

「あ、はい」

梢さんの印象はとても優しくそうな人だというのが一番だった。穏やかで優しくそうな人。外見とかは違うけど、雰囲気がお姉ちゃんに似ている。

「季節はずれで苦労したけど、ちゃんと用意できたわよ。樹君」
そういつて梢さんは奥から、可憐な花を持ってきた。

「きれいですね？なんて花なの？」

私の問いに、答えたのは梢さんではなく樹だった。

「アイレンだよ。花言葉は『幸せになつてください』というんだ」

「これ、おねえちゃんに？」

「ああ、結婚式にふさわしいだろ？」

樹は、アイレンの花をいとおしげに見つめた。そのアイレンの花の先に見ているのは、お姉ちゃんの姿。そんな樹を見ているのが辛い。樹が喜ぶならその想いを叶えてあげたいけど…… 明日、お姉ちゃんは結婚する。

「それじゃ、明日取りに来ますので、よろしくお願いします」

樹はそういって店を出る。続いて店を出ようとした私を、梢さんが呼び止めた。

「これは、ホトトギスという花の苗だけど、夏音ちゃんにあげる。

「はい。ありがとうございます」

私は小さなそれを受け取った。

「花言葉は、『秘めた思い』』というの。樹君の想いは、秘めたままになりそうだけど、夏音ちゃんの想いはいつか伝えられるといいね」
そういって、微笑んだ梢さんのまなざしはとても優しくかった。初対面の人に気がつかれるほど、表情が顔に出ていたのだろうか。

「ありがとうございます」

私はお辞儀をしてから、樹の後を追った。

昨日は、家に帰ってから梢さんの言葉が気になり、アイレンについて調べた。そしてそこには、『秘めた思い』があつて、でもそれは、樹のけじめだと思う。そうなら私は樹に何もしてやれない。できることは、見つめることだけ。

目の前で純白のドレスに、包まれたお姉ちゃんはとてもきれいだ

った。お義兄さんになる人は、たっぷり30秒ほどは声を出せずにいたほどだ。

「秋音さん。結婚おめでとう」

控え室にやってきたのは、樹だ。アイレンの花束を抱えている。

「こんなものしか贈れないけど……」

樹は、お姉ちゃんに花束を渡す。お姉ちゃんは、受け取った花束に顔を近づけて香りを吸った。

「ありがとう、樹君。私、花は詳しくないけどきれいな花ね。何という花？」

「アイレン。アイレンというんだ、その花。そして花言葉は『幸せになってください』……』といいます」

たぶん樹は、もう一つの花言葉を言ってしまうおつか迷ったのだと思う。それがあの間になったのだろう。でも樹は言わなかった。そしていつもの笑顔で「結婚おめでとう」とだけもう一度、告げた。

私と樹は、二人きりでロビーにいた。まだ披露宴は続いている。

「何故言わなかったの？ もう一つの花言葉」

私の問いに樹はしばらくの沈黙したままだったが、ゆっくりと口を開いた。

「秋音姉さんが、とつても幸せそうな顔で笑ったんだ。その顔を見ていたら何もいえなかった。たぶん俺では、そんな表情かおをさせてやれないから」

「そう。でも大丈夫？」

「ああ、あの顔見たら吹っ切れたよ」

私は、樹にハンカチを差し出した。樹の目に光るものを見つめながら。

「嘘つき……」

アイレンの花言葉は『幸せになってください』。そして、もう一

つの秘められた花言葉は、『私もあなたが好きでした』……

私は、樹の肩に持たれかかり、一緒に夜景を眺めていた。どれくらい時間が経っただろうか。樹が声をかけてきた。

「ハンカチ、洗濯してから返すよ。もう、戻ろうか」

私としては名残惜しいが、いつまでもここにいるわけにもいかない。

私は姉がプレゼントされた花束の中から、一本もらってきた向日葵^{ひまわり}を樹に渡した。

「それじゃ、この後はこの向日葵のように前向きに笑ってね」

「わかったよ」

会場に戻る樹のあとを追いかけて、彼の袖をちよつと遠慮しながらつかむ。

いつか、樹は私の想いに気が付いてくれるのだろうか？ でも気が付かなければ、無理矢理にでも気が付かせようと思う。今、決めた。

だけど今日は、向日葵に私の想いを託そう。

向日葵の花言葉は、『あなただけを見つめています』。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

アイレンの花言葉は「だかあばノ鷹城冨貴 作」という90年代の漫画より拝借しました。本当の花言葉は調べたのですがわかりませんでした。

たぶん、カトレアという分類で一括されているようです。

残りのふたつは。

ホトトギス 「秘めた思い」「永遠にあなたのもの」

向日葵 「あなただけを見つめている」「あなたは素晴らしい」など

読んだ方の心に何かが残る話になっていれば良いのですが、いかがでしたでしょうか？

宜しければ、一言でもかまいませんので、評価感想いただけたらうれしく思います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7955c/>

アイレンと向日葵と私の想い

2009年7月3日19時04分発行